

赤い光

松下達彦

遠くから蛙の鳴く声が聞こえてきた。古ぼけた柱時計が窓の外にうながされるようにゆっくりと一つ時を告げた。

五月の初めてであったが、妙に蒸し暑く感じられたのだろう、幼い私は布団を蹴飛ばしていた。時計の音に目覚めて左右を見回すと、祖父と母が私をはさむようにして眠っていた。それを見てやっと、自分が小学校を休んで田舎に来ていることに気づいた。蛍光灯の豆電球の小さな赤い光だけがじっと部屋を照らしていた。しばらくそれを見据えるうち、いつとはなしに再び眠りに落ちていった。

どれほど経ってからであろうか。祖父のかさついた細い手が私の腹の上に伸びてきた。ゆっくりとすべるように、私の蹴った布団をひきあげようとしていた。母がそれに気づいて私の布団をかけなおしてくれたことが曖昧な意識のなかに感じられた。私は安心して眠りについた。

祖父が亡くなったのはその朝のことだった。私の傍らで静かに息をひきとったのだった。私は起こされて別の部屋へ連れていかれた。いろいろな人がやってきて家中が慌ただしく動いている気配だけが感じられた。

祖母や母は心なしか紅い目をしていた。私は何を言ったらよいのかわからなかった。ただ、こういう時は大きい声を出してはいけないのだと思った。

日が暮れかかり、通夜が始まった。白の祭壇に金の飾り付けがまぶしかった。ひきのばされた祖父の写真と白布をかけられた遺体を交互に見比べた。来訪者は祖父の死に顔に手をあわせ、口々にその安らかなことを称えた。母は「虫の知らせ」で親の死に目に会えたのだと繰り返しつつぶやいた。祖父がこんなに早く逝ってしまうとは思っていなかったのだろう。祖父は私と母の顔を見て安心しすぎたのだろうか。数時間前まで隣に寝ていた祖父の死が何を意味するのか、私にはうまくのみこめなかった。

長い一夜が明け、ひきつづき葬式が行われた。午後、大勢の人に見送られて祖父の棺^{ひつぎ}は出ていった。

母は初七日^{しよなのか}まで残ることになり、私は学校へ戻るためにただひとり列車に乗せられた。夕陽に見送られるようにして東へ向かった。家までの十時間が二日にも三日にも感じられた。